別記様式第４

論文の要旨

ふ　り　が　な 氏　　名	たむら　　まさき 田村　　昌己
論　文　題　目	バーヴィヴェーカ中観思想の研究

論文の要旨

論文の目的と方法

初期般若経典に説かれ、ナーガールジュナ(ca. 150—250)によって哲学的に基礎付けられたところの空の思想をどのように解釈するか。インド大乗仏教はまさにこの空の思想の解釈を巡って思想的に展開し、瑜伽行派と中観派の二大学派を生み出すに至る。最初に成立した瑜伽行派は、唯識思想に基づき、二取空という形で空の思想を理解した。4—5 世紀に活躍したアサンガとヴァスバンドゥによって、瑜伽行派は思想的に体系化され、大いに台頭することになる。こうした状況下で、自ら「中観派」を名乗り、瑜伽行派の理解に異を唱えたのがバーヴィヴェーカ(ca. 490—570)である。彼は、ナーガールジュナの空の思想の真意は一切法無自性であると主張した。

バーヴィヴェーカによる瑜伽行派批判は、思想史的に極めて重要であるにもかかわらず、その実態は十分に解明されているとは言い難い。同批判が最も詳細かつ体系的になされる『中観心論』第 5 章について、近年サンスクリット原典が利用可能になりいくつかの研究が発表されているが、全体から見れば研究は緒についたばかりである。

本論文の目的は、『中観心論』を主資料とし、バーヴィヴェーカによる瑜伽行派批判の特色とその意義を明らかにすることである。

論文構成

本論文は「序論」「第 I 部・本論」「第 II 部・付論」より構成される。「本論」は全 3 章及び結論からなり、「付論」は翻訳研究からなる。

序論

序論では、研究の目的と方法について提示した上で、『中観心論』第 5 章の構成について概観した。

第 1 章「推論」

第 1 章では、バーヴィヴェーカが用いる推論について考察した。

第 1 節「バーヴィヴェーカにおける推論の役割」では、彼の思想体系における推論の役割を検討した。彼によれば、仏の言葉に関して相異なる理解が生じた場合には、推論に依拠しなければならない。その推論はアーガマに従うものであり、仏

の言葉の誤った理解を否定する役割を担っている。バーヴィヴェーカにとって、同じ仏の言葉を認めながらもそれを誤って理解している者たちとは瑜伽行派に他ならない。バーヴィヴェーカによる推論の使用は、彼らに仏の言葉の正しい理解をもたらすための試みとして捉えることができる。

第 2 節「遍充関係確立の論理」では、バーヴィヴェーカが用いる推論における遍充関係確立の論理を考察した。その論理とは「ある二者が共通の性質を有するならば、その二者は互いに区別されない」というものであり、有自性論を否定する帰謬法の論理として、古くは『方便心論』に見られ、ナーガールジュナやアーリアデーヴァ、チャンドラキールティ、さらにはシャーンタラクシタに至るまでの中観派の学匠たちによって用いられている。

第 3 節「四大種の無自性性論証」では、いわゆる無自性性論証のうち、四大種を主題とする論証を取り上げて考察した。バーヴィヴェーカの四大種説は、用増説によって各四大種の差異を説明している点で、説一切有部の四大種説と一致する。彼の四大種説は無自性性論証にも反映されており、そこではナーガールジュナ『根本中論頌』の論理や前節で考察した遍充関係確立の論理が用いられている。

第 4 節「五根の無自性性論証（１）：眼根と視覚を巡る分析」では、バーヴィヴェーカによる五根の無自性性論証を考察した。同論証では、眼根を見る主体とみなす見解と見る手段とみなす見解とが取り上げられる。バーヴィヴェーカによれば、世間の常識としては「識と共にある眼根が原因総体に依拠して色を見る」という説一切有部の見解が認められるが、彼自身は経量部の認識因果論が世俗のレベルで認められると考えている。このような自身の見解を前提として、一連の議論が展開されている。

第 5 節「五根の無自性性論証（２）：他学派学説批判」では、バーヴィヴェーカが自らの見解に基づいて展開する、眼根に関する他学派の諸学説批判を考察した。同批判で取り上げられるのは、眼光線説、トリグナ説、遍在説、火元素所成説、四元素所成火元素優勢説、到達作用説である。いずれの推論にも「勝義のレベルでは」という限定句が付されていないことから分かるように、バーヴィヴェーカにとって、他学派の者たちによる眼根に関する様々な構想は世俗のレベルでも受け入れられないものである。

第 2 章「空性理解」

第 2 章では、瑜伽行派と中観派の思想的対立の根本にある空性理解の相違に着目し、バーヴィヴェーカが瑜伽行派の空性理解をどのように捉え批判しているのかを考察した。

第 1 節「瑜伽行派空性理解批判」では、瑜伽行派の空性理解の特色である所謂「無の有」としての空性の特徴づけに対する批判を考察した。バーヴィヴェーカは、非存在と存在の矛盾、非存在、存在そのものの概念、仏陀の智の対象としての勝義、仏陀の智といった論点を取り上げ、いずれも帰謬法を用いて批判する。彼によれば、瑜伽行派は同派の空性理解に関して彼が指摘する難点を回避するためには、その前提にある唯識説そのものを放棄しなければならない。

第 2 節「依他起性批判（１）：生無自性説」では、縁起を巡る瑜伽行派とバーヴィヴェーカの見解の相違を考察した。瑜伽行派は「言語表現される自性は存在しない」という意味での無自性を主張する。この主張は言葉とその対象に対応関係がないことを意味する。バーヴィヴェーカによれば、この主張は世俗のレベルで認められる。しかしながら、彼にとって無自性は縁起という観点から導かれるものに他ならない。即ち、一切法は縁起するが故に勝義のレベルで無自性である。バーヴィヴェーカはこのことを瑜伽行派の生無自性説を批判することを通じて明らかにしている。

第 3 節「依他起性批判（２）：仮設とその根拠」では、仮設とその根拠を巡る瑜伽行派とバーヴィヴェーカの見解の相違を考察した。瑜伽行派によれば、仮設の根拠として〈他に依拠する自性〉（依他起性）が存在しなければならない。一方、バーヴィヴェーカにとって、諸法は実有ならざるものであり、そのような法を根拠に仮設も成立する。彼は仮設とその根拠を巡る批判を通じて、『菩薩地』以来向けられていた「最たる虚無論者」という強烈な批判に対する反駁を加えている。

第 4 節「円成実性批判：虚空の比喩と「真実」の清浄性」では、空性という真実を巡る瑜伽行派とバーヴィヴェーカの見解の相違を考察した。瑜伽行派は、輪廻から解脱への過程を説明するために、空性が雑染なるものと清浄なるものに区分されること、しかしながら空性は本来的に清浄なるものであることを虚空の比喩を通じて説く。これに対して、バーヴィヴェーカによれば、真実は自性を持つものではなく、絶対的に区分されないものであり、だからこそ虚空との類似性も成立する。

第 3 章「唯心説批判」

第 3 章では、瑜伽行派の空性理解の前提にある彼らの唯心説をバーヴィヴェーカがどのように批判しているのかを考察した。

第 1 節「夢の認識」では、瑜伽行派が外界対象の否定に際して用いる夢の認識の比喩を巡る議論を考察した。バーヴィヴェーカによれば、「三界は唯心である」という経典の言葉は外界対象の否定を意味するものではなく、心以外の行為主体や享受主体の否定を意味する。そして、夢の認識も所縁を有するものであり、外界対象の否定を導く喩例としては不適切である。

第 2 節「識二分説批判」では、唯心説を裏付けるものとしての識二分説に対する批判を考察した。バーヴィヴェーカは「認識は対象の顕現を有し、そのような認識をもたらす所縁が外界に存在する」という自身の見解に基づいて、一連の批判を展開している。

第 3 節「『観所縁論』第 1—5 偈批判」では、ディグナーガ著『観所縁論』第 1—5 偈で展開される外界非実在論に対する批判を考察した。バーヴィヴェーカは、経量部的な立場に立ち、外界に存在する同種の極微の集積体を世俗的な実有とみなす。これはディグナーガが提示する所縁の二条件を満たすから、所縁たりうる。

第 4 節「『観所縁論』第 6—8 偈批判」では、『観所縁論』第 6—8 偈で説かれる「認識内部の所知の形相が所縁である」というディグナーガの主張に対する批判

を考察した。バーヴィヴェーカによれば、瑜伽行派が識の実在性を主張する限り、認識の生起を説明する彼らの種子理論は成立しない。

第 5 節「輪廻と解脱」では、唯心説の枠組みで説明される輪廻と解脱に焦点が当てられる箇所を考察した。前節での指摘と同じく、バーヴィヴェーカによれば、識の実在性を主張する限り、唯心も輪廻から解脱への過程も説明できない。

第 6 節「入無相方便説批判」では、唯心説を前提とする瑜伽行派の修道論である入無相方便説への批判を考察した。バーヴィヴェーカによれば、自性の非認識こそが執着の滅をもたらすのであって、外界対象の非存在は何らそれに資するものではない。彼にとって、瑜伽行派の主張する唯識の肯定と外界対象の否定は増益と損減の二極論に他ならない。

結論

バーヴィヴェーカは瑜伽行派の学説を批判する際に、ある一つの方法を採用した。それは時代的にも内容的にも彼らの学説を網羅することである。バーヴィヴェーカにとって、瑜伽行派の学説は仏の言葉の「誤った解釈」に他ならない。それを否定し尽くして残るのは中観思想である。彼によれば、それこそが仏の言葉の「正しい解釈」であり、空性への悟入をもたらすものである。その意味で、彼は「誤った解釈」である瑜伽行派学説を網羅的に批判しなければならなかった。本論で考察した事柄はそうした彼の試みである。我々はここに中観派が形成される過程を見出すことができるだろう。

付論

付論では『中観心論』第五章の翻訳研究（付論 A）と『思択炎』第五章の翻訳研究（付論 B）を提示した。

備考　要旨は，日本語 4,000 字以内又は英語 1,500 ワード以内とする。